

| 特集 |

総合診療医のための

Medical Humanities

企画 | 藤沼康樹

第1部

本稿では、医療人類学における説明モデルがもつ物語性と人が「語る」行為の特徴をふまえながら、総合診療医が行う診察の特徴を検討する。さらには、医療の物語性の特徴や物語性そのものの限界についても考える。》》》 18

「医療化」は一定の利益（QOL 向上や社会適応など）をもたらす一方、医療費増大や健康格差、生命倫理の問題も生じている。どこまでが正当な医療の範囲か、社会全体での議論とその判断の重要性が求められている。》》》 23

現象学は人間の「生きられた体験」を主題とする。身体もまた主体によって「生きられたもの」であり、自己と世界を結びつける媒体である。「病い」は〈自己-身体-世界〉のつながりを根本的に変容させる体験である。》》》 26

患者や家族を「医療従事者が適切な判断をするための情報提供者」とみなす視点には、医療の還元主義的な世界観が色濃く反映されており、この視点を見つめ直すことが人をケアする際に極めて重要となる。》》》 31

人間を対象とした諸科学とは違い、精神分析はそれら科学の主体であるものを問題にする。そこでは話された説明や物語よりも、誤認や無視、嘘など、「言うことができない」という仕方で自らを示す無意識の欲望に目が向けられる。》》》 36

第2部

批評とは生き延びるための「環境評価」の技法であり、コペルニクスの地動説のように、自己を惑星的な運動へといざなう。『君たちはどう生きるか』から小林秀雄までを参照して、批評の面白さに迫る。》》 42

医師と患者の関係に潜む不確実性に耐えるには、〈ケアの倫理〉を支えに、言葉を尽くして対話を重ねることが重要である。》》 46

患者-医師関係は、権威的医師像から平等・利他的へと変化してきた。映画に描かれた医師像の変遷は、よりよい患者-医師関係を考える手がかりの1つとなる。》》 51

マンガやアニメなどにおいても、医療をモチーフにした作品は多く発表されており、それらの物語には、現実世界において病をもつ人が抱く不安や苦悩、医師-患者関係やチーム医療における葛藤がよく描かれている。なかでも『ブラック・ジャック』では、地域医療やプロフェッショナルリズム、生命と自然の畏怖、困難な状況での判断力など、他作にはみられない医療者が学ぶべき本質が示されている。》》 56

「芸術療法」の語を作ったのは、画家エイドリアン・ヒルだった。だが、彼が創立したアートセラピスト協会は「アート」より「セラピー」を重視するようになった。現在は「クリエイティブ・ヘルス」活動が「アート」の部分を補っている。》》 60

第3部

医師／医学生・人類学者合同の症例検討会は、医師や医学生が臨床現場で遭遇する「もやもや」に人類学者と医療者がともに向き合い、対話し、相互に学び合う場である。》》 66

医療に人文知を導入するHealth Humanities は、医師の人間理解・倫理感受性・不確実性への態度を涵養し、教育と臨床の質を深める重要なアプローチであり、教養教育、シネメデュケーション、地域実習などの教育場面で実践可能である。》》 71